

インターネットと英語の未来についての一考察

— クリスタル『地球語としての英語』とグラッドル『英語の未来』を中心に —

筏 津 成 一

Internet and Its Impact on the Future of English

— With Special Reference to Crystal's *English as a Global Language* and
Graddol's *The Future of English* —

Seiichi IKADATSU

序

21世紀を目前に控え、世界はますます「ボーダーレス化」、「グローバル化」の傾向を強めている。それに伴って、英語によるコミュニケーションも拡大の一途を辿っている。今や英語は国際語⁽¹⁾としての地位を不動のものにしたとあってよい。かつてロバート・マクラム (Robert McCrum) らが、自国語である英語の未曾有の繁栄ぶりについて、

統計はどうあれ、20世紀末の今日、英語は他のいかなる言語にもその比をみないほど広範囲に広がり、話されかつ書かれている。英語は地球を代表する言語、はじめて真の意味での世界語になりおうせたのである。(『英語物語』, p. 21)⁽²⁾

と、いささかの自負の念を持って述べた事が今や現実のものとなっている。⁽³⁾ 加えて、近年の「インターネット」(Internet)の急速な発展に伴って英語にたいする需要は以前にも増して高まっている。こうした時代背景にあつて、英語を第一言語としない国々、あるいは発展途上の国々においては、人々の英語学習熱は極めて高く、「英語」と「コンピュータ」の習得こそが国の発展、あるいは個人の社会的成功の必須条件であると賑々しく喧伝されている。たとえば、中国の大学生の間には「学好英語，計算機，迎接21世紀」(英語とコンピュータをマスターして21世紀を迎えよう)というスローガンがあるという。⁽⁴⁾ 皮肉にも、経済大国、科学技術先進国の我が国においても事情はさして変わらない。近年、多くの大学において、専攻分野の如何にかかわらず「英語」と「コンピュータ」が必修科目として義務づけられているのは、こうした時代的要求を反映したものであろう。

ひるがえって、「世界語としての英語」の発展は、デイヴィッド・クリスタル (David Crystal) も指摘するように、われわれの予測をはるかに越える速さで起こった。

すべてはほんの短い間におきた。1950年においては、英語が真の世界語などという見方は、何とも不確かな、いかがわしい、単に理屈の上での可能性にすぎず、冷戦による政治的な不安定にとりこまれた、定義も曖昧なら方向も定かでないしろもの、でしかなかった。(『地球語としての英語』, p.1)⁽⁵⁾

たしかに、過去10数年における英語を取り巻く環境の変化には急激なものがあつた。その最大の原因は、21世紀におけるコミュニケーション革命の主役ともなるべきインターネットの登場である。ちなみに『英語物語』には、「世界のコンピュータに収められている情報の8割は英語を媒体としている」(P.21)という記述はあるが、インターネットという言葉はまだ登場していない。また、1988年出版のクリスタルの『英語』(*The English Language* : Penguin Books)においても、まだインターネットへの言及はみられない。このことは、インターネットが90年代に入って爆発的に広まった新しい現象であることを象徴的に物語るものである。

こうした中、1997年、80年代末から90年代にかけて起こった英語を取り巻く環境の変化に後押しされるかたちで英語の未来をテーマにした2冊の書物が相次いで刊行された。前述のクリスタルの『地球語としての英語』とデイヴィッド・グラッドル (David Graddol) の『英語の未来』(*The Future of English* : The British Council) がそれである。⁽⁶⁾ 両書は、豊富な統計的データや最新の未来予測理論などを援用しながら、近年の社会環境の変化と科学技術の発展が英語に与えた影響と21世紀における英語の行方について論じたものである。両書の「序章」が、それぞれ、

本書で問題にしたいのは、(1)世界言語たるための条件とは、(2)英語はなぜその主たる候補者になりうるのか、(3)英語ははたしてその立場を保ち残しつつづけるのか、の三点に限られる。(『地球語としての英語』, p.6)

英語は広く世界に通用する言語とみなされているが、21世紀に入ってもその抜きんできた地位を保持しているのだろうか。今英語が使われているこの世界は、社会、経済、人口統計の面で、大きな過渡期の初期段階にある。英語が今後世界の最重要言語としての地位を外される可能性は考えにくいだが、その未来は、一部の人が考えるよりも、複雑で不確定なものである。(『英語の未来』, p.8)

と述べているように、その最大の関心は「21世紀においても英語が現在の地位を保持できるか否か」という点にある。クリスタルは英語の歴史的・文化的コンテクストの分析を中心に据え、他方、グラッドルは科学技術、世界経済、人口統計の動向が英語の未来に与える影響の分析に重点を置いている。しかし、「英語を取り巻く環境は複雑であり、その未来は、条件次第で行方が大きく左右される極めて不安定なものである」という認識において両書は一致している。さらに、いみじくもグラッドルが「インターネットは国際語としての英語にとって、コンピュータ分野の「旗艦」(flagship)と称すべきものだろうか」(p.13)と問いかけているように、両者ともインターネット・コミュニケーションを次世紀における英語のあり方を左右する重要なファクターの一つと位置づけている。以下、本稿では、両書における論考およびインターネットからダウンロードした最新データを踏まえながら、今後のインターネットの発展と英語の未来との関係について考察してみたい。

1 世界における英語使用人口の実態と今後の予測

最初に、現在の世界における英語使用人口について概観してみる。アメリカの言語学者ブラジ・カチュルーは図1のような3つの同心円、すなわち、「中心円」(the inner circle)、「外円」(the outer circle)、「拡大円」(the expanding circle)を用いて英語使用人口のタイプと推定数を表している。「中心円」国とは、イギリス、アメリカ合衆国等のように英語を主要言語として用いる国々を指し、「外円」国とは多言語環境にあって英語が「第二言語」として重要な役割を果たしている、シンガポールやインドなどの国々を指す。さらに、「拡大円」国は中国、日本のような英語に対して国際語としての重要性を認めつつも公的な立場を与えていない国々を指す。

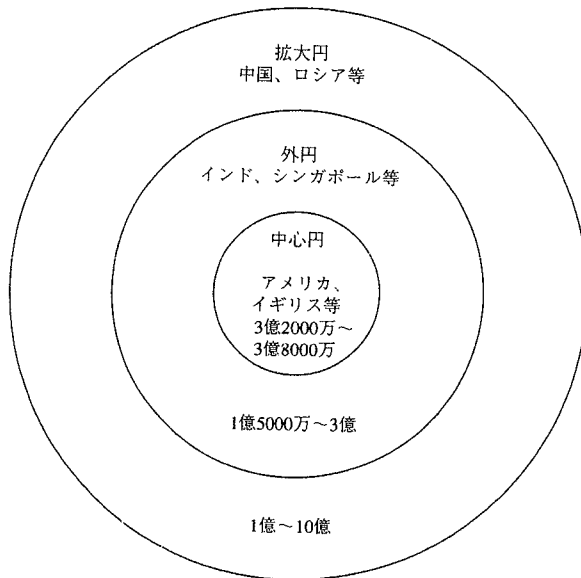


図1 英語の3つの円 (クリスタルの引用による, p.76)

また、インターネット上の「ENGLISH 2000」⁽⁷⁾のサイトは世界の英語使用人口について次のような推定値をあげている。

- (1) 英語は少なくとも世界75カ国（総人口は20億人以上）において公的あるいは、特別な地位を占めている。
- (2) 英語を第一言語とする人口は3億2,000万人から3億7,200万人、第二言語とする人口は2億3,500万人から3億7,000万人である。
- (3) 世界の総人口の4人に1人、すなわち12億から15億の人々が、何らかのレベルの英語能力を有している。さらに残りの4分の3の人々も英語を学びたいという希望を持っている。

これらの推定値から判断する限り、英語の未来は一見安泰に見える。しかし、現在世界で起こりつつある様々な変化を考慮すれば、グラッドルが、

英語の世界的人気は今すぐ危機に陥る恐れはない。ただし、英語が使われる世界のどの地域であれ、あるいは英語を用いるどの分野であれ、英語が国際語として保持している現在の優位な立場が、他の言語によって脅かされるはずがないとするのは、世界の経済・人口統計・政治の形態が変化する点を考え合わせると、愚かな発想でしかない (p.10)。

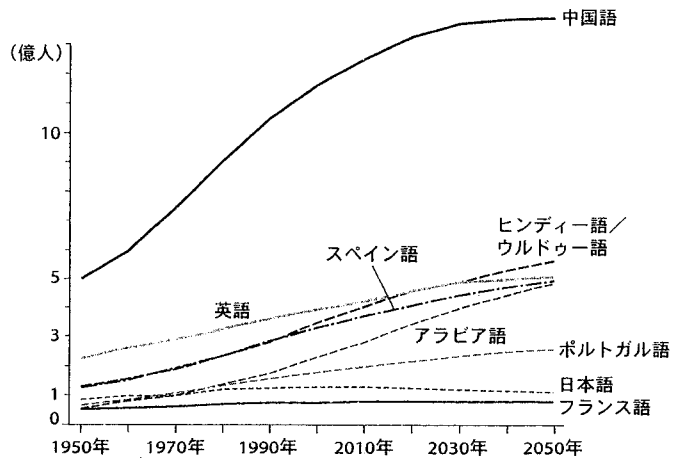
と指摘しているように、未来における英語の地位は必ずしも楽観視することはできない。描きうるシナリオとしては、1) 今以上に英語の独占状態が進行する、2) 中国語、アラビア語といった他の有力言語が英語の立場に取って代わる、3) 英語が多様化して、かつてラテン語がフランス語、スペイン語、ラテン語および他のロマンス語に分流したように数種類の言語に分かれる、⁽⁸⁾ 4) 英語と他の複数有力言語の併存競合状態になる、などがあるが、これらはいずれもラディカルなシナリオであり、実際にはこれらの変化が複雑に入り交じった多元的な状況が出現すると考えるのが現実的である。例えば、グラッドルは今後、英語は次の3つの変化を経験するであろうと予測している (pp.45-6)。

- (1) 英語それ自体に変化がおり、発音・語彙・文法が変化する。同時に、文章の種類やジャンルも変化を被る。
- (2) 英語の「地位」が変化する。英語を母語としない人々の間で、これまでとは異なった言葉の意味・形態を獲得し、より広い社会的な機能のために使われることになる。
- (3) 英語が「量的な」変化を経験し、英語人口の変化、英文科学雑誌やコンピュータ通信における英語使用の割合に変化が生じる。⁽⁹⁾

今、われわれが問題としている英語人口については(3)において言及されているが、これは二つの要素、すなわち、英語の第一言語使用者と第二言語・外国語使用者に分けて検討する必要がある。第一言語としての英語使用者数は、「イングリッシュ・カンパニー社」(The English Company Ltd., <http://www.english.co.uk>) が世界の言語状況に対する都市化と経済発展の潜在的影響力を調査するために開発した「インゴコ・モデル」(The engco model) を参照することができる(グラッドル, p.72)。これによると、英語の第一言語使用者は2030年頃までは緩やかに増加していくが、そこから横ばい状態に入り、2050年の時点では約5億800万人に達すると推定されている。このように、第一言語使用者の推定は比較的容易であるが、英語使用者のトータル人口を決定するのは、むしろ第二言語使用者および外国語使用者の動向である。しかし、これらは政治形態の変化、景気変動、技術革新などに影響される部分が多く、その推定作業は必ずしも容易ではない。同様に、特定の使用領域における英語の占有率も、政治・経済・科学技術などの不確定要素によって大きく左右される可能性がある。そうした不確定要素の中で、インターネットは最も影響力の強いものの一つであり、英語人口の予測においては、特にその普及率に注目する必要がある。

1	中国語	13.84
2	ヒンディー語/ ウルドゥー語	5.56
3	英語	5.08
4	スペイン語	4.86
5	アラビア語	4.82
6	ポルトガル語	2.48
7	ベンガル語	2.29
8	ロシア語	1.32
9	日本語	1.08
10	ドイツ語	0.91
11	マレー語	0.80
12	フランス語	0.76

インゴコ・モデルが予測する、2050年における世界の主要言語を母語とする人口（単位：億人）



図・表2 インゴコ・モデルに基づく主要言語における第一言語使用者の人口推定値

2 インターネットの媒体言語としての英語

最初に、世界のインターネット利用者人口について概観してみる。グラッドルによれば、1997年の初めには、世界のインターネットの利用者は約5,000万人、そのうち約2割がヨーロッパ在住であった (p.138)。ところが、インターネット上の「ヌア・インターネット・サーveys」(NUA Internet Surveys, <http://www.nua.ie/surveys/index.cgi>)の最新データでみると、1999年の4月段階での利用者数は1億6,300万人余りで、わずか2年間で約3倍へと急増している。次に、英語がインターネットの媒体言語として採用された歴史的経緯、およびその優位性についてみると、⁽¹⁰⁾ クリスタルは英語がインターネット上で優位に立った主な理由として、次の2点を挙げている (『地球語としての英語』, pp.145-7)。

- 1) 元来、インターネットは1960年代末にアメリカ国防省によって開発された全米規模のコンピュータ・ネットワーク「ARPANET」をベースとして作られ、その中継点の半数以上がアメリカにあるためにその使用言語は英語となった。
- 2) 技術上の理由として、ネットにデータを乗せるために最初に考案されたプロトコル(通信規約)は、英語のアルファベット向けに開発されたものであった。

他方、グラッドルも次の2点を挙げて、インターネットにおける英語の優位性はその発達史からみて必然的結果であると述べている (pp.137-8)。

- 1) インターネットに関わりが一番深いのは科学界であり、そのリング・フランカである英語がインターネットの初期段階から使用されていた。

- 2) 現在、ウェブ・サイトの9割は英語使用国を拠点としており、その通信やウェブ・サイトの大多数は英語によるものである。

こうした英語の優位性について、「ENGLISH 2000」は「推定約4,000万人の世界のインターネット利用者のうち、約80%が英語でコミュニケーションをしている」と報告している。⁽¹¹⁾ この英語の使用率80%という数値に関して、クリスタルは次のようにコメントする。

このような調子で英語と非英語の各語のキーワードについて、思いつくままに探索を続けていくと、ほぼ80%という数字がきまって顔を出す。だがこの80%というのは1996年に当てはまる数字で、将来は下降していくことになる。ラインに乗る個人の国の数が増え、インターネットの利用もすさまじく増大していくことを思えば、この比率の変化もすこぶる急激であろうと想像される (p. 151)。⁽¹²⁾

インターネットにおける、現在のこのような英語の寡占状態について、マイケル・スペクターは「ワールド・ワイド・ウェブの三つの英単語」(『ニューヨーク・タイムズ (1996年4月)』掲載論文)の中で、「英語力」がネット有識者とそうでない人々の二つに峻別する可能性を示唆している。

これこそは知的帝国主義の究極の形である。この商品はアメリカ渡来なので、われわれとしては英語に適応していくか、使うのを止めるかの何れでしかない。それは個々の企業体の権利である。だが、世界を何億という人々に開くための技術などというものは、それは悪い冗談にすぎない。この技術は世界を新しい活動の「持てるもの」と「持たざるもの」の二つに分けるだけのことだ (クリスタルの引用から、pp. 148-9)。

これについてクリスタルは、「持たざるもの」、すなわち、インターネットの提供する知的パワーを享受できない知的孤立集団「知的ゲッター」が現実にも生まれる可能性があるとするならば、それは英語力というよりも、むしろ経済的、教育的要因によるところが大きいとの見解を示している。

ただ知的ゲッターが国際レベルで出現する危険性を減らすことはできる。いずれにせよ、この危険は経済学や教育にかかわる点の方が多い。すなわち、人々は果たしてコンピュータを手に入れることが経済的に可能だろうか、人々は果たしてそれを使いこなせるだろうか、国には必要な下部構造が備えられているのだろうか、データベースの整備充実のための金繰りは入手可能だろうか、等々がこれである (p. 149)。

他方、外国語としての英語力の恩恵にあずかっている人々 (すなわち、英語をマスターした外国人達) は、概して、リング・フランカとしての英語の拡大に肯定的であり、インターネットによって、さらに多くの人々が英語学習意欲をそそられ、結果として、英語使用人口は今後より一層増えるであろうと予測するむきもある。⁽¹³⁾ このように、インターネットの普及によって媒体言語としての英語の地位が今後どのように変化していくか、という点に関しての意見は一様ではない。ただ、少数言語にとって有利な展望も開けている。

ウェブの利用者は90カ国近くに上り、Eメール用の器材はあと70カ国にも拡がっている。インターネット上の非英語話者の利用者はかくして絶えず増え続けている。(中略)これは言語の消失を憂えている向きにとってよき訪れであるばかりか、地球レベルでの相互理解の可能性が、地域のアイデンティティの主張に降参すべきではないとしている向きにとってもよき訪れである(『地球語としての英語』, p.152)。

そして、インターネット上においてすべての言語が平等な立場を主張するようになれば、英語は現在の圧倒的に優位な立場を譲って選択肢の一つになる可能性も出てくる。

英語以外の言語によるインターネットの素材が、今後10年間に劇的に増えることは間違いない。英語は当面その卓越した地位を保ち続けるが、結局は数多くの言語の中の一つとなるであろう。したがって、インターネットにとっての母なる言語はともかくも英語であるとの考えは誤解を招きかねない(グラッドル, p.165)。

英語圏を除いて、今後インターネットの急速な普及が見込まれるのは、中国を中心とするアジア地域である。これについて、経済発展との関わりで考えてみたい。次の図は、1990年と2050年における世界の富の分布状況である。これによれば、今後半世紀の間に世界各国・地域間の経済関係は劇的に変化すると予想されている。具体的には、現在、世界の富の55%はビッグ・スリー諸国(アメリカ、EU、日本)によって占められている。ところが、21世紀半ばまでには、アジアの新興諸国がその60%を占めるまでに経済成長して、現在と立場が逆転すると予想されている。

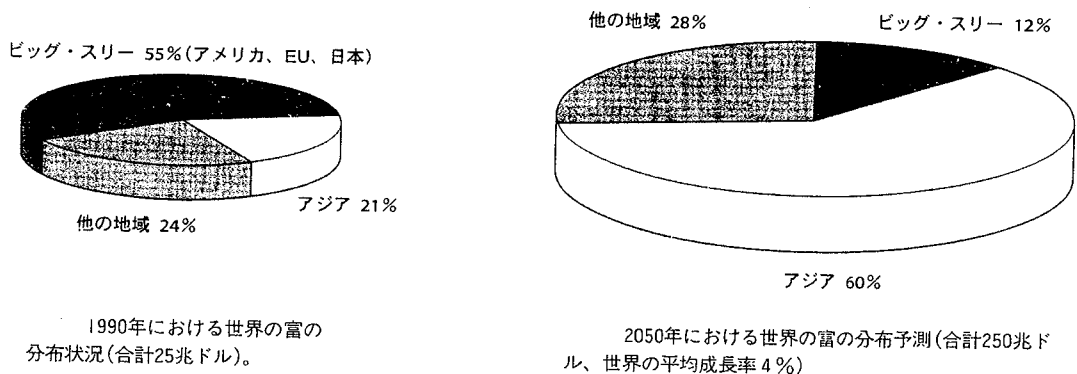


図3 1990年および2050年における世界の富の分布状況(グラッドル, p.77)

グラッドルは、この21世紀におけるアジア諸国の急速な経済成長を根拠として、アジアにおいてインターネットが驚異的に普及すると予測する。

アジアで使われるホスト・コンピュータの数は、いつかはビッグ・スリー諸国のそれを追い越すであろう。さらに、当初は研究職という世界的なエリート同士が国際コミュニケーションの道具として使い始めたインターネットは、将来は局所的・文化的・商業的な目的で使われることが多

くなるだろう。同時に、インターネットがさらに広く利用されるようになるにつれて、当然これまで以上にさまざまな言語が使われることになろう (p. 138)。

たしかに、北京語をはじめとして他種類の言語によって運営されるネットの数は、今後さらに増大していくのは必至である。しかし、複数の言語の相互互換が可能なウェブ・サイトの開発はまだ緒に着いたばかりである。クリスタルも、「現状では真に複数言語による WWW の完成はまだまだ遠い先の話である。つまり、エンドユーザーが自分で選ぶ言語で普通にデータを入力し、どんな相手先も何の問題もなしにデータを受け取りディスプレイできるようなウェブは、まだ長期の目標に留まっている」(p. 147)と述べて、当分の間、インターネットにおける英語の地位が揺らぐことはないと考えている。ただ、インターネットの国際化を促進する一要素として考えられている自動翻訳システムの開発がこれまで以上に急速に進展すれば、その時期も当然早まってくることになる。このウェブ・トランスレーションの可能性についてインターネット上のイングリッシュ・カンパニー社の「グローバル・イングリッシュ・ニューズレター」(*Global English Newsletter*, 以下 *GEN* と略記)の第2号には次のようなレポートが掲載されている。

そういった未来はすでに始まっている。最も有力なインターネットのサーチ・エンジンである「アルタ・ビスタ」(Alta Vista) は現在、利用者に翻訳でサイトを見るサービスを提供している。目下のところ翻訳は英語と他の5つのヨーロッパ言語、すなわち、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、そしてスペイン語の間で利用可能である。翻訳は「シストラン」(Systran)によって行われている。このシストランの機械翻訳装置は欧州連合(EU)において内部資料翻訳のために使用されている。(中略)このシストランは中国語・ロシア語と英語の翻訳用、および日本語との双方向翻訳用もあるが、これらの言語はまだ、無料のアルタ・ビスタ・ウェブの翻訳サービスでは利用できない。⁽¹⁴⁾

このように科学技術の急速な進歩には目を見張るものがあり、ウェブ・サイトにおいて英語を「リレー言語」とした複数言語間の自動翻訳が利用可能になる日もそう遠くはないであろう。そうなれば、結果的にインターネットにおける英語の相対的地位は低下せざるを得ない。ここでは、そうした傾向を加速させている要素の一つとして、「インターネット上でのあらゆる言語によるコミュニケーションに向けて」("Towards communicating on the Internet in any language...")というスローガンのもとにインターネットの国際化を目指したアリス・テクノロジーとインターネット・ツサイエターの共同プロジェクト「バベル・サイト」(<http://babel.alis.com:8080>)があることを指摘しておきたい。

3 中国の動向とインターネットにおよぼす影響

世界最大の人口を誇る中国の動向は、21世紀における世界の政治・経済・文化など、あらゆる分野に大きな影響をおよぼす可能性をもっている。英語の未来についてもまた然りである。たとえば、*GEN* 第2号には「6. 中国一次代を担う一大言語勢力か」(6. "China? The Next Linguistic Power?")という中国に関するレポートが掲載されている。少し長くなるが要点を引用してみる。

仮に、合衆国が20世紀における英語拡大の最大の牽引車であったとするならば、21世紀における

超大国 (superpower) である中国は、世界規模での言語配置とコミュニケーションに対して同様のインパクトを与えることができるであろうか。(中略)

英語は現在アセアン諸国 (ASEAN) において使用されている言語である。そして海外在留の中国人 (華僑) がアセアン諸国の経済流通の大部分を支配しているという事実にもかかわらず、このアセアン地域における中国の急速な成長に対して周辺諸国が (警戒心を込めて) 注ぐ真剣な眼差しは、英語の役割を弱めるところか、むしろ、それを一層強めていきそうに思われる。

しかしながら、中国経済が発展し都市が成長するにつれて、注目を浴びようになるのは中国のこうした地域への影響力だけではない。中国の経済活動のほとんどは北京語を話さない特別経済特区に集中している。これらの地域における北京語、英語、あるいは広東語、呉語といった地域語の相対的地位とその使用は、言語学者および海外投資家にとって、間違いなく、興味を引かれる問題となろう。

このように、アジア地域において英語がこれまでの地位を保持し続けるか、あるいは北京語または他の地域言語がそれにとって代わるのか、という問題はアジアの経済発展と密接に結びついている。同時に、経済発展とインターネットの普及も密接な関係にあり、この2つの要素の検討抜きにはアジアにおける英語の未来を予測することは不可能である。この中で、アジア諸国の経済発展についてはすでに上で言及した。ここでは、中国におけるインターネットの普及率について考えてみたい。中国においても近年、インターネットの接続は急速に増えているが、グラッドルは「中国では1996年の利用者は推定10万人だが、この数字は個人加入の増加により、さらに増えているのではないだろうか」(p.139) と述べている。これを「ヌア・インターネット・サーベイズ」の情報と比較してみると、その驚異的な普及率に驚かざるを得ない。

コンピュータ・エコノミックス社の最近の報告によれば、中国は2005年までに、日本を抜いて、アメリカに次いで世界で2番目のインターネット人口を抱えることになるという。これによると、2005年までにアメリカが1億2,660万人の推定インターネット使用人口を持ち、以下、中国3,730万人、日本3,470万人、そしてドイツ、カナダがそれぞれ、1,720万人、1,700万人と続いている。

(中略) しかし、中国がインターネットの潜在力を理解するようになる前に、主要な経済問題を克服し、インターネットに対する政治姿勢を見直す必要がある (Feb. 9, 1999)。

また、同サイトの続報 (Apr. 7, 1999) では、「中国では、現在インターネットを利用していない人の71%以上の人々が利用したいと思っている」との調査報告があり、21世紀のインターネット・ビジネスの巨大マーケットとしての中国の動向に世界が注目していることを示している。下に示した最新の統計 (May. 13, 1999) によると、1998年の中国の利用者数は150万人に達しており、3年前の約15倍へと激増している。また、日本との比較で見ると、過去2年間の増加率は中国が7倍以上であるのに対して日本は2倍以下であり、中国と日本の普及率の差は歴然としている。そしてこの普及率の差は今後さらに拡大していくものと予想される。

COUNTRY	DATE	NUMBER	% TOT POP.	SOURCE
Japan	October 1998	14 million	11.1	Nikkei Market Access Survey
Japan	March 1998	12.1 million	9.6	Nikkeibp
Japan	January 1998	8.84 million	6.40	Access Media International
Japan	October 1997	10 million	8	IDC Japan
Japan	September 1997	8.6 million	6.80	Nikkei Market Access
Japan	September 1997	8 million	6.32	Dataquest
China	December 1998	1.5 million	0.1	Xinhua News Agency
China	July 1998	1,175,000	0.08	Nando Times
China	January 1998	500,000	0.004	Utusan Online
China	August 1997	150,000	-	Reuters
China	June 1997	200,000	0.001	Frost & Sullivan

中国のこうしたインターネット利用者の急増を支える原動力は、言うまでもなく、その巨大な人口にある。2050年の段階における第一言語の人口推定値は、1位が中国語で13億8,400万人、他方、英語は5億800万人で、中国語は英語の約2.75倍の母語話者を持つと予想されている。⁽¹⁵⁾ 仮に、こうした巨大人口を背景として、中国を中心とした世界最大のネットワークが出現した場合、その使用言語はどのようになるのであろうか。すでにみたように、コンピュータとそれを動かすプログラムは、主として英語を母語とする国の発明であり、これまでのところは、コンピュータ関連の言語に関しては英語の独断場であった。しかし、

英語が今後、ソフトウェア製品とデジタル化された知的財産を通じて広まり続けることは間違いない。しかし、言語が制約される時代は過ぎ去ったように思われる。例えば、主たるアメリカ製プログラムには中国語版が用意されている。もちろん、OS（オペレーティング・システム）の「ウィンドウズ」、ワープロソフトの「マイクロソフト・ワード」にも中国語版がある。（中略）かつてのコンピュータと英語の密な結びつきは途切れてきたのである（グラッドル、p.84）。

という指摘からもわかるように、21世紀における「中国語によるインターネット」は、巨大な新アジア経済圏を背景にして、我々の想像を超えた躍進ぶりをみせるかもしれない。それに伴って、現在、中国人の間で異常な高まりを見せている「英語学習熱」⁽¹⁶⁾ は、将来的には徐々に低下していくことが予想される。そしてこの傾向は、自動翻訳システムの進歩と相まって、中国のみならず同じ言語圏・経済圏を構成する他の国々へも波及していくものと予想される。⁽¹⁷⁾

4 インターネットの英語に与える影響

インターネットの発達が使用言語の多様化を促進する要因の一つとなることを、中国を例にみてきたが、予想されるもう一つの変化は、英語内部における言語的变化である。すなわち、インターネットは、単に英語の使用地域・使用領域を拡大するばかりでなく、英語それ自体とテキスト構成法をも変容させる力を持っているのである。

英語の用途もまた以前よりも広がりを見せている。英語はどこにあっても、技術や科学の発達、経済学や経営の新しい考え方、新しい文学や娯楽のジャンルにおける最前線に位置しており、そうした状況は必然的に、新たな語彙、文法形式、話法や書法を生み出した。新たな分野への英語の拡大を最もはっきりと示しているのが、インターネット通信や「ネット英語」の発達である(グラッドル, p.10)。

たとえば、個人間、あるいはグループ内における電子メールの交換が活発化すると、公の場におけるインフォーマルで、土地特有の言葉 (vernacular), あるいは内集团的 (in-group) な言葉の使用が促進され、それらの地位は標準的なものへと引き上げられることになる。⁽¹⁸⁾

こうした英語の質的变化を促すもう一つの要因として、すでに言及した自動翻訳システムの開発がある。インターネットの発達によって多言語間コミュニケーションの必要性が高まれば、当然のことながら、それに伴って自動翻訳の問題がクローズアップされてくる。事実、機械翻訳は商業的場面ですでに実用化されつつあり、今後の技術革新によってはもっとも飛躍が期待される領域でもある。使用領域によっては、自動翻訳が極めて容易な場合もある。たとえば、ボーイング社のような国際的な企業では、海外の技術者にも理解しやすい英語をもちいて整備マニュアルを作成しているという。

「統制された英語」の使用には、自動翻訳をより容易にする意図もある。つまり、限られた英語形式で文章を書けば、目標とする言語の限られた形式に翻訳できるからだ。英語を「リレー言語」、すなわち、ある言語を別の言語に翻訳する場合に英語をその中継点とするケースが増えてくれば、新しいかたちの言語接触が生まれてくるだろう。その時、言語は少なくとも限定された形式において、互いに似通ったものとなり、英語の意味論的・統語論的な構造をそなえることになるかもしれない(グラッドル, p.85)。

この英語を仲介とした、「A言語」⇔「リレー言語」(英語)⇔「B言語」という多言語間コミュニケーションは、従来は特殊な地域方言とのコミュニケーションのような非常に限られたケースにおいてみられた言語接触のスタイルであった。仮に、これが自動翻訳機を通して日常化すれば、「リレー言語」としての英語はA、B両言語から何らかの言語的影響を被ることになるだろう。すなわち、翻訳作業をより効率化するために、英語および他の当該言語は、語彙、文法形式等において相互に影響し合い、その結果、従来の英語にはなかった独特の「自動翻訳文体」とでも呼ぶべきスタイルが生まれる可能性がある。そして、さらにインターネット英語との複合作用によって、英語はこれまで持ち合わせなかった、まったく新しいタイプの表現形式を獲得するかもしれない。こうした事態が進行すれば、将来的には、ホームページを様々な言語で開設する必要がなくなってくる。インターネットが、あるいは利用者自身のコンピュータがインターネットと連動した自動翻訳装置を備えるようになるからである。そして最終的には、世界における英語学習の必要性を下げる結果となるだろう。⁽¹⁹⁾

英語自体の変化とともに注目すべきもう一つの点は、英語話者の立場、すなわちネイティブ・スピーカーと第二言語話者との相対的地位の関係である。仮に、今の勢いで第二言語話者が増大すれば、今後10年ほどの間にその人口はネイティブ・スピーカーを上回ることになり、英語における権威の中心が第二言語話者へとシフトすることになる。これによって、母語話者は、現在享受してい

る数々の特権を失うことになる。例えば、その一つに「英語教育産業」がある。⁽²⁰⁾ 現在、英語を母語とする国の英語教育市場の占有率は、英語を第二言語とする地域の英語教育提供者の動きが活発になるにつれて必然的に低下していくことになる（グラッドル，p.163）。こうした動きは、将来的に英語を母語とする国の英語教育提供者が世界市場で苦戦を強いられることを意味し、イギリスのような「英語教育産業立国」は少なからぬ打撃を被ることになる。

結び

以上見てきたように、インターネットは「地球語としての英語」の未来に対して、量的にも質的にも、極めて大きな影響を及ぼす可能性を秘めている。そして、このインターネットの普及は発展途上国の政治的安定、経済的發展および人口動態と深く関係しており、英語の未来を予測するにはこれらの国々についての情勢分析が必要不可欠となる。インターネット上における英語の地位に関していえば、大きな人口を抱える国々、特に英語を外国語としている国々の動向がその行方を大きく左右することになる。その意味で、21世紀の超大国と目される中国に世界中の注目が集まるのも極めて当然である。ただ、そうした新しい世界情勢の中で、仮に「英語の地位」が低下したとしても、それはあくまでも他言語との相対的關係においてであり、それが世界における英語使用者の絶対数の減少を意味するものでないことを心に銘記しておく必要がある。

注

- (1) 多くの場合、「国際語としての英語」(English as an International Language)、「世界語としての英語」(English as a World Language)、そして「地球語としての英語」(English as a Global Language) という3つの表現は、ほぼ同義的にもちいられている。しかし、『地球語としての英語』の訳者である国広正雄氏は、最初の表現のバリエーションである「国際英語」(International English) という用語には狭量な国家意識が反映されているとして、次のように述べている。

実はこの「国際英語」という命名は、いまでは小生全く気に入ってはいない。(中略) 今やわれわれの最大の忠誠の対象は、この地球というホシとそれをつつみこむいわゆる地球環境であるべきなのに、国家主権を所与の前提とする「国際英語」という造語にはためらいと悔悟を感じる。それに反し、本書の著者は少なくとも訳語としては地球英語という。国際英語にまさること数等である（「あとかぎに代えて—英語私見」，p. 213）。

ただし本稿では、これら3つの用語を同義語とみなして特に区別せず、コンテキストに応じて適宜もちいるものとする。

- (2) R.McCrum et al, *The Story of English* : Penguin Books, 1986. 以下、本書からの引用は邦訳『英語物語』（岩崎春雄他訳，文芸春秋社，1986）による。
- (3) クリスタルの「政治的な問題について一方的に肩入れしたり、英語について書くものが不幸にも陥りがちな勝ち誇ったような姿勢（‘the kind of triumphalist tone’）をとることもなく、世界英語についての客観的な記述を提示しようと企てたのである」（『地球語としての英語』，p.2）という言葉は、こうした論調を念頭においてのものと思われる。
- (4) 沼野治郎「中国における大学英語教育近況」（JACET 中国・四国支部：アジア地区大学英語教育研究会，研究報告『アジアの英語と英語教育』），1997，p.28

- (5) *English as a Global Language*: Cambridge University Press, 1997
- (6) 今年初め、両書はそれぞれ、『地球語としての英語』(国広正雄訳, みすず書房, 1999), 『英語の未来』(山岸勝栄訳, 研究社, 1999)として翻訳出版された。以下, 引用はすべてこれらによる。
- (7) <http://www.britcoun.org/english/eng2000.htm> (ただし, 1999年5月の段階においてこのサイトはアクセス不能となっている)「ENGLISH 2000」は, プリティッシュ・カウンシルによって推進されたプロジェクトで, 1) 英語の世界的な使用状況について予測し, 英語の新しい教授法と学習法の開発を手助けすること, 2) イギリス英語の教授用商品とサービスを, イギリスならびにイギリスの協力国双方のためになるよう位置づけることをその目的としている。
- (8) 1985年発刊の国際英語雑誌『英語の今日』(*English Today*)の編集主幹であるトム・マッカーサー(Tom McArthur)は第11号(1987年)において“The English Languages?”という特集を組み, 彼自身, 同名の論文を寄稿している。その中で彼は, ラテン語とのアナロジーから英語の将来について論じ, いわゆる「古典ラテン語」が現在の世界語としての英語とは異なった位置づけにあったことを論拠として, 英語の未来をラテン語の辿った運命から類推することは誤りである, と主張している。(pp. 9-11)。
- (9) グラッドルは, 現在の英語の支配的状況が, 複数の言語がより広範に混在する状況に取って代わられることが予想される領域として, 次の4つを挙げている(p. 15)。
- 1) 世界的なオーディオビジュアル市場, 特に衛星テレビ市場。
 - 2) インターネットおよびコンピュータをベースにしたコミュニケーションの領域(言語関連ソフトと文書処理ソフトを含む)。
 - 3) 経済のグローバル化に伴う科学技術の移転とそのプロセスの領域。
 - 4) 外国語学習の領域, 特に, 発展途上国では, 地域的な貿易の発展により, 英語以外の言語の経済的重要性が高まる可能性がある
- (10) インターネット発展の歴史をはじめとする全般的な情報については, 「インターネット・ソサイエティー」(Internet Society, <http://www.isoc.org/isoc/>)のサイトで見るができる。
- (11) 「ENGLISH 2000」の「English Frequent Asked Questions」による。
- (12) グラッドルも, 将来的には英語のシェアが減少していくことを次のように指摘する。

コンピュータの使用が一般的になるにつれて, インターネット上での英語の量は情報全体の4割にまで減少すると予想されている。(中略) 1996年, 「インターネット・ソサイエティー」は, 英語以外の言語で書かれたサイトの利用を容易にする, ブラウザー用の新しいプロトコルを発表した。将来的には, 遠方のサイトとの交信の際, ブラウザーが, こちら側がどの言語を「好みの言語」としているかの情報を伝えてくれるだろう。こちらの希望する言語のページが用意されている場合, そのページは英語でなく希望した言語で自動的に検索されることになる(p. 141)。

- (13) ポーランドの批評家パベル・ラドコフスキーは「インターネットのリング・フランカたる英語」という一文の中で次のように述べている。

インターネットの拡大は最大の主要言語としての英語の立場を強めている。(中略) 言葉を変えていうなら, ネットワークが広がれば広がるほど, 英語を習うように仕向けられる人々の数は増し, それだけに英語の立場は強化される, というわけである(クリスタルの引用による, p. 150)。

- (14) 「14. ウェブ・トランスレーションが主流に」(14. "Web Translation Goes Mainstream")

- (15) イングリッシュ・カンパニー社の「イングコ・モデル」による。
- (16) 中国における外国語学習に関して言えば、1960年代はロシア語が中心であった。その後、1970年代末から1980年代にかけては、西側からの投資を奨励するために、英語教育に力点が置かれるようになった。この間の事情について『英語物語』は次のように述べている。

最も人気のあったのはBBC制作の *Follow Me* というシリーズで視聴者は5000万人を越え、出演者のキャシー・フラワーは一躍有名人となった。キャシー・フラワーは当節の中国における英語熱を次のように描いている—「店へはいると、60代のお年寄りが二人、前の晩に聞いたばかりの *Follow Me* のせりふを実地に練習しているんです」。英語熱は人々に多大な犠牲を強いることともなっている。月収36元の若者が、その3分の1を英語の授業や辞書、カセット、小説などにあてているのである (p.58)。

この時から、すでに15年以上が経過した今日、この傾向はさらに進行しているものと推測される。しかし、香港では北京官話（標準中国語）を優先する空気が生まれ、英語学習熱にかけりが見えてきたという報告もある（グラッドル, p.120）。

- (17) 「言語の流動を予測するひとつの方法は、海外旅行の目的地と出発地を予想し検討することである。2010年には世界の主要地域を飛行機で移動する人々の数を試算すると、アジアで大きな変化が生まれ、2010年までには世界の航空輸送の半数以上をアジアが占めることになる。（中略）これらの状況が言語に及ぼす影響を予測するのは容易ではないが、北東アジアと東南アジア間の旅客機が他の区域に勝って（この区域での移動が、特にビジネス活動に関係することから）、地域の共通言語として北京官話（標準中国語）が勢力を伸ばすであろう」（グラッドル, p.102）
- (18) 『英語の未来』 p.140
- (19) 同書, pp.141-42
- (20) そもそも、本書『英語の未来』もブリティッシュ・カウンシルの委託を受けて、英語教育や英語学習の新興にたずさわる機関が将来の方向付けを行う際の情報源として書かれたものである。最終章においては、イギリスの世界的な「ブランド・イメージ」促進に向けて、イギリス人がこれまで世界の英語教育に果たしてきた役割の再検討が行われている。

(1999年6月10日受理)